

北方領土返還要求という懸案を携えて訪ソした田中首相が、ソ連側の厚い壁に体当たりしてはね返されたまま帰国したとき、北京では、「北方領土問題で堂々と日本の立場を主張した態度は立派だった」と張香山・中日友好協会副会長が大いにほめあげたという。中国は日ソ会談の成り行きをかたずをのんで注目していたが、田中首相の体当たりだけが目立って、具体的成果の乏しい日ソ会談に大いに満足のようである。「ソ連社会帝国主義の不意の奇襲」に備えて

●外交時評

北方領土と中国

中嶋嶺雄(東京外国語大学助教授)

対ソ警戒を強めている中国としては、当然のことであろうが、問題は、中国にどのように評価されたり、声援されたりすることが、日ソ間の懸案解決につながるにばかりか、問題をますます困難にしていることである。

この点では、さきの中国共産党十全大会での周恩来政治報告が、ブレジネフ体制のソ連を非難したなかで、「それほど世界情勢を緩和させたいなら、なぜチェコスロバキア、モンゴルから軍隊を撤退するとか、日本の北方四島を返還するなど一、二のことをやってみせて誠意を示さ

ないのか」と述べたこと、ついで去る十月二日の国連総会本会議での喬冠華・中国代表団長演説が、この周恩来報告の言葉をそのまま繰り返していたことは、北方領土問題の将来に決定的な意味をもたせしめたといえよう。

つまり、中国共産党大会および国連総会という社会主義政治と国際政治の二つのひのき舞台で、中国は北方領土問題を取りあげてソ連にたてついたのであつて、いまや北方領土問題は中ソ対立の好餌にもなつてしまつたのである。



こうしてもともと返還の意思の薄いソ連を著しく刺激することとなり、中国に対するメンツからしても、当面は絶対に返還できない状況がつくられてしまつた。田中訪ソは、こうした経緯の直後だったのである。日ソ間の懸案について、きわめて大きな発言力をもつビクトル・マ

エフスキー「ブラウダ」評論員は、日ソ会談後のインタビュで、「第二次大戦後の未解決の諸問題」という日ソ共同声明の表現には、領土問題が当然含まれるとする——日本側の解釈を真つ向から否定し、「それは声明に書いてある

とおりで。そこには領土問題などという言葉は一つもないではないか」と答えている(「読売新聞」十月十二日付)。

昨年初頭のグロムイコ訪日以来、日ソ関係が微妙な「前進」を示して動き出したのは、日中関係の急速な進展に対するソ連なりの対応にほかならなかつたが、すべての切り札を出しつくして日中接近が実現してしまつた今日、もはやソ連が甘い態度に出るはずはない。日中接近が進めば、ソ連も譲歩するのではないかと見たのは大きな間違いで、それは切り札を出しつくすまでの一定のプロセスについてのみいえることである。現段階で少しでも効果的に問題を発展させようとするなら、少なくとも中国に対して、北方領土返還支援をことさらにうたわな

いでほしい——とたのむことが必要だつたはずだが、そうした手も打てなかつたのであろう。ともかく、中国の「声援」はこうして「ありがた迷惑」なのであるが、もつとも、北方領土の返還は国民の世論であるとはいへ、無類の「経済大国」にのし上がった日本が、沖繩を取り返し、さらにまた北方領土も取り返すのか——といった世界の眼を意識したとき、この問題の解決にはまだまだ時間がかかつた方が大局的にみて日本の国益につながるのではないかと——とも思われるだけに、こうした認識に立てば、やはり中国の「声援」には感謝すべきであるのかもしれない。